

# ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [23]

キケロ『法律論』より — 直説法未来完了形と接続法完了形 —

秋山 学

今月はキケロ『法律論』からテキストを選んでみましょう。なお本文中で(太字でない)斜体にした *quom* は *cum* の古めかしい形です。また同じく太字でない斜体にした *quoniam* は、この *quom* (= *cum*) に *iam* (「すでに」) が付されてできた語彙です。

**原文** Nam quī sē ipse **nōrit**, primum aliquid sē habere sentiet dīvinum ingeniumque in sē suum sicut simulacrum aliquod dicatum putabit, tantōque mūnere deōrum semper dignum aliquid et faciet et sentiet, et *quom* sē ipse **perspexerit** tōtumque **temptārit**, intellet quem ad modum ā nātūrā subōrnātus in vītam **vēnerit**, quantaque instrūmenta habeat ad obtinendam adipiscendamque sapientiam, *quoniam* principiō rerum omnium quasi adumbrātās intelligentiās animō ac mente **concēperit**, quibus inlūstrātīs sapientiā duce bonum virum et, ob eam ipsam causam, cernat sē beātum fore. — *De legibus*, I, XXII, 59.

**仏訳** Car tout homme qui se connaît sentira d'abord qu'il possède quelque chose de divin, et la force spirituelle qui est en lui lui paraîtra comme une effigie sacrée : il voudra rendre ses actes et ses pensées dignes d'un si grand bienfait, et, quand il se sera observé à fond et aura fait l'épreuve de toutes ses aptitudes, il se rendra compte des ressources dont la nature l'a équipé à son entrée dans la vie et de tous les moyens qu'il possède pour acquérir et garder la sagesse : lui qui, tout d'abord possédant dans son âme et dans sa pensée les intuitions encore obscures de toutes choses, n'aura qu'à les mettre en lumière, guidé par la sagesse, pour se concevoir en tant qu'être bon et, par le fait même, heureux.

**訳** なぜなら、自ら自身を知る者は、まず、自分が何か神的なものを有しているということを感じるであろう。また自らのうちなる理性が、あたかも何か奉納された神像であるかのように思うことであろう。そして、神々のかくも大いなる賜物に対し、常に何か適わしい事柄を、行ないまた考えることであろう。さらに、自らを見つめ、すべてを試みたならば、自分がどのようにして自然により装いを受け生命へと来たったか、また智慧を獲得し所有するためにどれほど大きな道具を

有しているかを理解するであろう。彼は初めから、あらゆる事柄に対する知識を、精神と心といわば影絵の状態を抱いているのであるから、智慧を師としてこれらの知識を照らすならば、自らが善く優れた人となるであろうということ、そしてまさにその故にこそ、自分が幸福となるであろうということを認識すべきなのである。

今回の例文には「直説法未来完了形」の活用形が3個現れています。それは(非斜体の)太字にした **nōrit**, **perspexerit**, **temptārit** の3つです。順に語形を説明しますと、

1) **nōrit** (= **nōverit**) : **nōscō** (「知る」; 不定法は **noscere**) の直説法未来完了能動態・3人称単数。

2) **perspexerit** : **perspiciō** (「見つめる」; 不定法は **perspicere**)、同上。

3) **temptārit** (= **temptāverit**) : **temptō** (「試みる」; 不定法は **temptāre**)、同上。

一方、斜体の太字にした 4) **vēnerit** と 5) **concēperit** は、この直説法未来完了形と混同しかねない活用形ですが、正しくは「接続法完了形」です。順に説明しますと、

4) **vēnerit** : **veniō** (「来る」; 不定法は **venīre**) の接続法完了能動態・3人称単数。

5) **concēperit** : **concipiō** (「抱く」; 不定法は **concipere**)、同上。

このように、直説法未来完了能動態、接続法完了能動態のいずれに関しても、その語形は、ラテン語動詞の基本3形(1. 直説法現在能動態・1人称単数; 2. 直説法完了能動態・1人称単数; 3. 目的分詞第1形 = 完了受動分詞中性単数主格)のうち、第2形の語幹(完了幹)から導き出されます。上の各動詞に関して順に完了幹を示すと、

1) **nōv-**; 2) **perspex-**; 3) **temptāv-**; 4) **vēn-**; 5) **concēp-**

となります。注意したいのは、直説法の未来完了形は、これら動詞完了幹に **-erō**, **-eris**, **-erit**, **-erimus**, **-eritis**, **-erint** を順に加えれば得られるのに対し、接続法の完了形は、これらの完了幹に **-erim**, **-eris**, **-erit**, **-erimus**, **-eritis**, **-erint** を加えれば得られるという点です。つまりこれら2つの活用形は、1人称単数を除いて同形となるのです。

では両者はどのようにして見分けられるのでしょうか。例文に即して説明しますと、

1) 2) 3) は、いずれも副文中にあって、主文の未来形定動詞 (**sentiet**, **putabit**, **faciet**, **sentiet** 及び **intellet**) に対し、それ以前の行為を表す「相対時称」の直説法未来完了形です。これに対して 4) は「間接疑問文中の接続法」、5) は「理由の *cum* に伴う接続法」ということになります (*quoniam* = *cum* + *iam*)。2) 3) も *quom* (= *cum*) 節の中に含まれていますが、その用法は「時の *cum* に伴う直説法」に分類されます。これは「歴史的 *cum*」の用法に似ていますが、「歴史的 *cum*」は、過去の一回的行為を表す際に、副文中で接続法の未完了過去か過去完了と共に用いられる用法で、主文の動詞は副時称(過去3時称)に置かれます。2) 3) の場合、主文の動詞は **intellet** (未来形; 本時称の一つ) なので、副文中の動詞は直説法未来完了となります。(あきやま・まなぶ)